

第 IV 部

教育にとっての動物の存在の意味

滝 坂 信 一

盲・聾・養護学校における動物とのふれあいに関する調査
—全国調査の結果にみる実態と展望—

滝 坂 信 一
笹 本 健
當 島 茂 登
徳 永 亜希雄

教育にとっての動物の存在の意味

滝坂 信一

(肢体不自由教育研究部)

はじめに

もともと我が国の幼稚園や保育園、小学校にはウサギ、チャボ、アヒルなどの動物が普通に飼育されていたし、子どもたちが家畜をはじめ動物に触れる環境は日常生活の中にくらでもあった。しかし、動物と触れ合うことの意義や重要性が言われながら、子どもの暮らしとこれら動物との距離はますます広がっているように見える。まして学校という場に動物との日常的なふれあいが位置づけられるということは、決して容易なことではなくなってきている。以下では、学校教育における動物飼育や動物とのふれあいの意味と絡ませながら、「教育における動物」についての今日的意義を考えてみる。

1. 学校における動物飼育

岡山市立開成小学校のインターネットホームページ(以下、HP)を見ると、同校には「開成小ふれあい動物ランド」があり、<金ケイ、チャボ、七面鳥、クジャク、ウサギ、マガモ、ヤギ、ウコッケイ、ガチョウ、ホロホロチョウ>が飼育されていると紹介されている。まず驚くのは、その動物種の多さである。飼育の目的は、

- ① 命の尊厳さ、神秘さに気付いて命を大切にすることを養う。
- ② 肌で動物に触れて、温かさを感じることによって、互いの連帯感、人類愛、生物への親しみを感じる。
- ③ 世話をすることにより、勤労意欲や労働の大切さを知る。

だという。中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機―」(1998)は、「子どもたちが身に付けるべき「生きる力」の核となる豊かな人間性とは、

- i) 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
- ii) 正義感や公正さを重んじる心
- iii) 生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- iv) 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- v) 自立心、自己抑制力、責任感
- vi) 他者との共生や異質なものへの寛容

などの感性や心である」と述べている。

開成小学校の動物飼育に関する3つのねらいはこの内容

に対応しており、現在動物飼育を行っている多くの小学校で考えられているねらいと共通していると想像できる。この取組みは、「学校は、子どもたちに何をどのような形で提供する場としてあるのか」について行われている一つの問題提起である。そして、この実践は学校が「知識偏重」の教育を見直す必要に迫られているということと、これら i)~vi)に挙げられた内容を育む環境が家庭や地域社会において脆弱になってしまったために学校が意図的に引き受けざるを得なくなっているということ、そしてその一環として動物飼育が導入されているということの意味している。しかし、学校五日制と新学習指導要領実施を機に話題となっている「基礎学力」重視とこういった取組みとの間をどのように調整し社会的な認知を得ていくかについては、今後大きな障壁が立ちあがる可能性がある。

2. 他の生命存在とともに暮らす

戦後社会は、機能的な側面や効率を重視して<生産―流通―消費>というシステムを整備し、消費者には口に入る食物の元の姿は見えなくなった。魚は切り身でしかなく、肉は部分にさばかれてパック詰めされ、私たちが食として他の生命を取り込むことによって自らの生命を得ていることを実感する機会はほとんどなくなってしまった。言い換えれば、生命と食が分離し、生命は観念的なものになってしまった。また、核家族化や少子化の進行によって、兄弟姉妹の誕生や親族の死の場面に遭遇することも少なくなった。子どもたちは「愛される」、「世話をされる」という経験はあっても、育ちの中で自分自身が他の存在を「愛する」、「世話をする」という経験をもつことが非常に難しくなっている。また、相手を変える(変えさせる)のではなく、こちらがあり方を変える(調整する)ことによって、相手とのよい関係を作るという体験が難しくなっている。すなわち、地域社会において子どもの精神生活を育む人的なまた環境的な条件自体が解体してしまった。

さて、飼育されている動物は、自力で生きていくことができない。餌をやることも、飼育舎を掃除することも飼育する側に依存し、飼育する側は継続的な取り組みを必要とする。すなわち、学校で動物を飼育することを考えれば、それは教職員と子どもたちに<「不自由」=思うようにならない>体験を強いる。動物の飼育は、相手である動物に飼育する側が合わせていく、言わば「添っていく」行為に

他ならない。保護され依存を基盤に生活しており、自らが依存される体験をもつことが非常に難しくなっている現在の子どもたちにとってこの経験は非常に大きな意味を包含している。

3. 細分化された学習から「総合的な活動」からの学習へ

「子供に[生きる力]と[ゆとり]を」とした中央教育審議会(第一次答申、1996)は、これからの学校が目指す教育として、「[生きる力]の育成を基本とし、知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、子供たちが、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。そして、知・徳・体のバランスのとれた教育を展開し、豊かな人間性とたくましい体をはぐくんでいく」とし、「[生きる力]が全人的な力であるということ踏まえると、横断的・総合的な指導を一層推進し得るような新たな手だてを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられる」として、<横断的・総合的な学習>を推進する必要があるとした。

以下に、動物の飼育を通して行われた教育実践例を挙げる。

(1) 開成小学校のアイガモ農法

平成12年度、5年生の子どもたちがアイガモ農法に取り組んでいる。発端は、社会科の学習のなかで「自分たちの手でのお米作りがしたい」という声が起こり、話し合った結果「福祉に役立つお米にしよう」と意見がまとまったことだという。さらに、安全なすなわち無農薬の米にしようということになり、子どもたちはアイガモ農法に挑戦することになる。話し合いから、

- 田んぼを借りる
- 苗を手に入れる
- 電気柵を取り付ける
- ひなを取り寄せる
- 卵を取り寄せる
- とり小屋を造る

といった計画が出され、地域の方から田を借り、アイガモの卵からひなをかえすところから活動が始まる。春、子どもたちは田植えをし、孵卵器を借りてきて卵から7羽のひなをかえす。さらに21羽のひなを取り寄せ、外敵からひなを守りさらにひなが逃げ出さないように電気柵を取り付け、大きなとり小屋を造る。夏休みには、世話当番を決めて毎日餌やりをしている。名前までつけられたアイガモ達の「仕事」によって、子どもたちは秋に240kgの米を収穫することになる。その米は「うまい安全カモバンザイ」と名づけられて1kgずつ袋詰めされ、家から持ち寄った不要

品の販売も含めた「5年生のアイちゃん市場」フリーマーケットを開いてかなりの収益をあげる。また、米は地域のお年寄りや施設のお年寄りに配ったり、保護者やお世話になった人を招いての「おにぎりパーティー」を開いている。この子どもたちは、平成13年度にも引き続きアイガモ農法に取り組んでいる。

(2) 長野県伊那小学校の飼育活動

伊那市立伊那小学校では、総合学習や総合活動の場所としてつくられた「ともがき広場」にヤギやヒツジを飼育している。平成10年度には2年生が24kgで借り受けた牝豚の、発情を経て出産準備に至るまでの飼育に取り組んでいる。そこには、季節に合わせた飼育場所の工夫から健康管理、これらを行うのに必要となった体重測定や飼育の資金集めなどに伴う計算や豚の提供者であり飼育の相談相手である畜産家とのやり取りに必要な手紙書き、また「ブタさんの歌づくり」や絵画など様々な学習過程生れ展開されている。

また、特殊学級の子どもたちの取り組んだポニーの飼育は、一人の子が「ともがき広場」でヒツジに乗ろうとしてかなわなかったことがきっかけになっている。餌や水をやり、ブラッシングをし、馬糞を片付け、乗るなかで、ポニーへの愛着が表現や観察する力を育て文字や数量、時間の学習を動機づけていく。いずれも、子どもたちが地域の人々に働きかけ、提供や貸与を受けた動物たちである。

また、平成13年度には、2年生が「羊さんと気持ち良く生活できるようにしよう」をテーマに3匹の羊「太陽」「ゆうき」「孝ちゃん」と名づけた夏休み明けから飼育し始めている。子どもたちは、このなかで、なかなか思うように散歩してくれない羊たちにどうしたらいいのか頭を悩ませ、工夫していくことになる。

これら二つの実践を辿って気づくことは、子どもたちが出会った動物に強く引かれていくという事実であり、そこから生れた子どもたちの発想と意欲が重視され活動の出発点となっていることである。活動が始まり、次々と子どもに課題を投げかけていくのは動物の存在と触れ合いそのものであり、課題に気づくのは子どもたち自身である。教師におおよその見通しはあっても、その都度に生じる個々の課題は予め予測できず、答えも予め準備されていない。子どもたちはアイガモを、豚を、ポニーを見つめ、育てたい、触れ合いたいという意欲に導かれながら様々な学習機会を得ていくことになっている。この学習形態は決して教科書では実現しない。

4. 養護学校での実践

長野県木曾養護学校の高等部1年生は、6月に行われる7日間の作業実習を在来種木曾馬を保存する牧場「木曾馬の里」で行っている。学年最初の作業実習を牧場で行うのは、

1. 仔馬が生まれている
2. 夏毛に変わっており美しい
3. 気温が暑すぎない(梅雨にもなっていない)
4. 適度な人数の一般客がくる
5. 乗馬の活動で、外乗ができる

といった環境の中で、子どもたちが作業に意欲的に取り組み、作業をすることの意味を実感するためだという。この学校は、牧場の協力を得ながら行ってきた生徒の馬との様々な触れ合い場面の様子からこの活動を開始している。平成14年度には、「生徒の興味関心と作業遂行力に応じて作業内容に多様性を持たせる」ことを工夫し、次のような活動を組んでいる。

活動の手順：

- ① 個々のルートで牧場へ(9時半)
- ② 厩舎清掃(馬房、通路)
- ③ 第1グループ：昼食づくり*
第2グループ：馬房へおが粉敷き、給餌・水、放牧馬への給餌。
- ④ 乗馬、引き馬、馬の手入れ、放牧
- ⑤ 昼食(職員を含む)
- ⑥ 乗馬
- ⑦ スクールバスにて学校へ移動(14時半)
* 1回目：具だくさん焼きそば
2回目：カレーライス
3回目：五平餅、キュウリ、ナスの浅漬け、味噌汁
4、5回目：味噌汁(お弁当持参)
6回目：おにぎり、味噌汁

障害のある子どもたちは、多くの場合保護者からばかりでなく多くの人々からの強い庇護の下に育っている。他方、自閉症や重度障害のある子どものように、話し言葉がないなど他者にわかるコミュニケーション手段を持たなかったり、行動の意味を理解してもらえない場合、大きなストレスをかかえて日常生活を送っていることが多い。しかし、これらの子どもたちが心を寄せて動物たちに近づいていくと、私たちの社会に流通している言葉や行動の様式、態度とは全く異なるかたちで彼らはそれに応えていく。しかもそれが馬や牛といった大型動物であった場合、子どもたちを心理的に受入れ癒す力を持っている。例えば馬の背に乗る(馬が自分の背にさせる)ということは、自分の身体と心を馬に預け、馬は相手を受け止めることを意味している。そして、このような動物たちを世話することは、庇護され

る存在から相手を保護する存在への転換をあるいはそういった相互的な関係を体験することになる。

5. 農業高校の新しい展開

「学校が家庭や地域社会にとって垣根の低い、開かれたものとなることは、学校の教育活動をより多彩で活発なものにするとともに、家庭や地域の人々の学校に対する理解をより深めることに大いに資するものと考ええる。」(「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」中央教育審議会 第一次答申、1996)として、今、学校は「地域に開かれる」ことを通じて再生を図ろうとしている。

農業高校の教育のなかにも大きな変化が見られる。これまでの農業高校の主な内容であった農業従事者及び農業生産物加工技術者の育成に加えて、愛玩動物飼育やアニマルセラピーに関するコースや科目が置かれるようになってきた。さらに、農業高校が持つ農場を地域の社会資源として開放し、飼育している家畜を媒介とした活動自体を教育活動に位置づける実践が見られる。以下幾つかの例を挙げる。

(1) 島根県立出雲農林高等学校

小動物・愛玩動物飼育による動物セラピー・繁殖生理・動物バイオ等について、最新の基礎的な知識・技術を学ぶ<動物工学コース>がある。

平日は「動物ふれあい広場」として幼稚園や保育所、小学校に開放し、土・日曜日は地域の人々に開放している。HPには小学生向けのページ「動物ふれあい広場 わいわいどうぶつらんど」があり、動物を紹介している。飼育動物は、ラマ、牛(ホルスタイン)、ヒツジ、ヤギ、ウサギ(チンチラ)、ウサギ、サル(アカテタマリン)、ブタ(ミニブタ)、プレーリードッグ、マーラ、ロップイヤー、ワラビー、ウサギ(アンゴラ)、サル(リスザル)、コンゴウインコ、ガン、ペリカン、オシドリ、フランスガモ、モリフクロウ、アイガモ、コウライキジ、ニワトリ(クロガシワ)、クジャクと、多岐にわたる。

(2) 茨城県立水戸農業高等学校

牛、豚、鶏、馬、犬、ウサギ、マウス等が飼育されており、「スクールパーク」として地域の幼稚園、小中学校に開放し、畜産科の生徒が「総合実習」の時間に対応している。年間2~3000人が訪れる。科目に「ペット」が用意されている。

(3) 岐阜県立大垣農業高校

平成7年度に設置された<動物科学科>は、牛や豚、ニワトリなどの家畜類の飼育・管理といった学習内容に加え、アライグマ・グリーンイグアナ・木曾馬・小鳥・熱帯魚な

どのペットと呼ばれる伴侶動物、ラット・マウス・モルモットなどの実験動物、そして地域の野生動物についての基礎知識・管理や実験など幅広い内容を扱う。

学校は地域との交流を積極的に行っており、春には近隣の幼稚園・保育園・小学校が遠足の見学場所として学校を訪れ、動物科学科のたくさんの動物と触れ合いイチゴ狩りをしたりして本校の生徒たちと過ごす。

(4) 岡山県立高松農業高等学校

畜産科学科が地域との交流として幼稚園の子どもたちの学校訪問を受け入れており、動物と触れ合う機会を提供している。また、ふれあい動物園の実施している。

この他、学校を開放するなかで教育活動が行われるだけでなく「移動動物園」として、幼稚園や保育園、小学校に出かけていくなどの学校も出てきている。

これら農業高校の取組みは、「生徒自身が日常飼育している愛着対象としての動物を市民に開示し」、「動物を媒介にして生徒と市民が交流し」、「この交流の豊かさによってさらにまたこれらの動物に会いたい（これらの動物を市民に会わせたい）と感じる」という循環をもっている。動物に出会うことそれ自体が目的になる一般のミニ動物園とはこの点で大きく異なる特徴がある。

6. 動物と触れ合う形態

学校の教育活動に関連して子どもたちが動物と触れる機会の工夫は次の3つの場合がある。そして、それぞれによって少しずつ活動や体験の内容も比重が異なることになる。

(1) 学校内で動物を飼育する

この形態は、動物が学校を住みかにするということの意味している。子どもたちは飼育される動物の生命を丸抱えすることになり、「食から排泄」、「生から死」にいたるあらゆる場面に立ち会う。併せて飼育することに伴う「不自由」を体験することになる。

(2) 学校に動物がやってくる

この形態は動物が「来訪者」になることであり、移動動物園がその典型的な例である。また、学校によっては数ヶ月あるいは数年動物の貸与を受け、ともに過ごす場合がある。前者の場合、安全性が確保され、抱いたり撫でたりして触れるという活動が中心に行われる。後者では、動物の1日の姿を見ることができ、子どもたちは日常の世話を通じて動物の健康に責任を感じることになる。

(3) 動物と触れ合うために校外に出かける

動物園、牧場、近隣の畜産農家を訪問するという場合が典型例と言えよう。この形態は子どもたちが「来訪者」になることを意味しており、飼育の専門家がいる場で動物のくらしに触れることになる。

7. 教育における動物と課題

(1) 大型動物の活用

全国の小学校3000校へ調査によると、ウサギ56%、ニワトリ39%、サカナ36%、チャボ32%、セキセイインコ21%、アヒル6%となっており、小動物が多く飼育されていることがわかる。(財団法人中央教育研究所「生活科の学習環境等に関する調査研究第三次報告」、3000校送付、1148校回収、1993) その主な理由は飼いやすさ、すなわち管理のしやすさにある。しかし、子どもたちが身体全体を動員し、また、力を合わせてかかわっていくことを考えた時に、もっと大型家畜の導入が検討されてよい。これら大型家畜の中には、馬のように子どもたちが自らの心と身体を預けることが可能な動物もいる。また、日常的な触れ合いの体験を通じて私たちの衣や食の生活を考えることになる豚や牛、ヒツジといった家畜もいる。

(2) 中学生・高校生への取り組み

社団法人日本理科教育振興協会の調査(1999)によれば、「課題研究や野外観察など多様な学習活動を通して、個性や能力を伸ばさせること」を目指して中学校に設けられている「選択理科」において<飼育・栽培>を行っているのはわずか2.7%であり、その内容は「植物栽培。動物飼育(ドジョウの飼育、観察など)」となっていて、哺乳類飼育はほとんど行われていない。しかし、自己や他者、社会的価値との葛藤ななかで自己形成をすすめる青年期にある子どもたちが、ことばを媒介とせず大型家畜を世話し働きかけることを通じてもつ心的交流の体験の意義は大きい。

(3) 生命の尊厳と保護(愛護)

飼育動物のなかで、家畜に属する動物は、もともと使役のために人間に飼われる動物である。使役の内容は、次のように分類できる。

- ① 動力：荷役、農作業
- ② 労力：盲導、警護、セラピー
- ③ 肉体の提供：食、毛皮
- ④ 存在の提供：ペット

いずれにせよ彼らは生命存在を人間に提供している。そしていずれの場合でも、彼らは私たち人間にその生命を依存しており共に在ることによって伴侶性が生ずる。そのような存在が不当に扱われることは決してあるべきではない。

この意味で、教育の場において動物飼育が行われる時、その動物たちが教職員と子どもたちにとって学校生活における「パートナー」という認識が基盤となる必要がある。

(4) 感染症や衛生面の課題

飼育動物から人間への感染症に関する社会的な意識が高まり、これに伴って教育の場から動物を遠ざける力が他方で働いている。関係者が衛生面の管理方法や感染症に関する知識をもち、適切な管理がなされることは、この領域を広げ充実させていくために欠くことができない。また、このことについて子ども自身が正しい知識と管理方法を知っていくことは、子どもたちが動物と接していくなかの必然として位置づけられる必要がある。

(5) 関係者の支援

本稿の事例で行われているように、学校近隣にある畜産農家や動物飼育に詳しい地域の人々との交流や協力を得るなかでこの活動が始められ、工夫されていくことが重要である。このような活動は、「開かれた学校づくり」の実質的なものと言える。なお、文部科学省がインターネット上に設けた『総合的な学習の時間』応援団のページには、「動物飼育について」「動物愛護について（動物飼育の指導助言）」「動物福祉について（資料提供、指導助言）」対応してくれる団体として、(社)日本獣医師会、(社)日本動物福祉協会、(財)日本動物愛護協会、(社)日本動物保護管理協会、(社)日本愛玩動物協会が挙げられている。

さいごに

本稿では、学校教育というなかで動物との触れ合い、特に飼育活動がどのように捉えられ教育活動のなかに活かされているのかを中心に事例をもとに検討した。その結果、単に「飼う」のではなく、教育素材の柱として位置づけ活動を展開している例のあることがわかった。こういった取り組みは、特殊学級や養護学校にも見られた。

さて、現代社会は、<機能>という観点に大きな価値においてシステムの開発・整備を進めてきた結果、私たちの心に荒廃をもたらすことになってしまった。学校もその例外ではなかった。それは、「わからない」(言語によって説明することが難しい、あるいは見通しが確定できない)存在(要因)を社会・学校から排除していった結果である。私たちは今、ようやくその問題の重大さに気づきつつある。

中央教育審議会答申をはじめ子どもの育ちや教育に関する議論が「心」の問題に言及する背景がそこにはある。

そのようななかで飼育される動物たちは私たちに、実は私たち自身がこの社会の在り方を見直すなかで人間性の復活を実現していかなければならない方向性を示唆し、「飼育される」ということを通じてその機会を私たちに提供している。

【引用・参考文献】

- 1) 伊那市立伊那小学校：研究紀要「うちから育つ」平成10年度、1999
- 2) 茨城県立水戸農業高等学校：
<http://www.suino.ed.jp/>
- 3) 岡山市立開成小学校：
<http://academic1.plala.or.jp/kaisei/index.htm>
- 4) 岡山県立高松農業高等学校：
<http://www.takano.ed.pref.okayama.jp/>
- 5) かいせい：岡山市立開成幼稚園・小学校、1999-2000
- 6) 片岡美春：岡山市立開成小学校第5学年総合学習指導案、1999
- 7) 岐阜県立大垣農業高校：
<http://www2.famille.ne.jp/~dainou/jindex.html>
- 8) 財団法人中央教育研究所：「生活科の学習環境等に関する調査研究第三次報告」、1993
- 9) 島根県立出雲農林高等学校：
<http://izuno.shimanet.ed.jp/>
- 10) 社団法人日本理科教育振興協会：理科教育教材の活用等に関する総合的実践研究、1999
- 11) 中央教育審議会：第一次答申、1996
- 12) 長野県木曾養護学校：公開研究発表会「木曾馬とのかかわりを活かした学習の実践から」、平成14年6月、2002
- 13) 鳩外太郎：初等中等教育における生命尊重の心を育む実験観察や飼育の在り方に関する調査研究、平成11～12年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、2001
- 14) 三澤美智代：伊那小学校の動物飼育について（私信）、2002

* 本稿は出版社の承諾を得て「滝坂信一：教育にとっての家畜の活用、農業技術体系畜産編追録第21号 p.11-19、社団法人農村漁村文化協会、2002」に加筆・修正したものである。